

地域情報（県別）

【埼玉】県内年間講演数182「性教育をやりたくて産婦人科医になった」-高橋幸子・埼玉医科大学産婦人科助教に聞く◆Vol.1

県内4大学の学生が多職種連携を学ぶ事業も推進

2024年8月16日（金）配信 m3.com地域版

子どもや若者に性のことをもっと知ってもらおうと、埼玉県の各地で性教育を行う産婦人科医がいる。2023年に実施した講演は182。埼玉医科大学の高橋幸子助教は大学6年ごろに知った女子少年院での性感染症の広がりや日本の学校教育の課題を踏まえ、「性教育を行う医師になろう」と決意した。「衝撃的だった」大学時の経験とは。現在のポジションや仕事内容を踏まえ、ユニークな医師のこれまでを辿った。（2024年7月15日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)



高橋幸子氏（本人提供）

——埼玉医科大学病院と先生ご自身のホームページによると、複数の仕事を兼任している印象を受けました。まずは、現在のポジションと仕事内容をお聞かせください。

埼玉医科大学では所属先が3つあります。医療人育成支援センター・地域医学推進センターの助教、産婦人科の助教、医学教育センターにも身を置いています。仕事のメインは最初に挙げた同センターでのもので、こちらでは地域医療における多職種連携を学生に学んでもらっています。

具体的には、県内4つの大学、埼玉医科大学と埼玉県立大学、城西大学、日本工業大学の学生が大学・学科の垣根を越えて6人1チームになり、県内80カ所の医療機関のいずれかで4日間実習を行う、というものです。この取り組みは、「彩の国連携力育成プロジェクト（SAIPE・サイピー）」と呼ばれ、私は1チームに1人就く「教員ファシリテーター」（進行役）を担っているほか、4大学の運営会議にも参加して学生をサポートしています。

工学部生が多職種連携実習に参加、ケアプランに広がり

——「多職種連携」は在宅医療や総合診療の取材ではよくキーワードに挙がります。これを学生のころから体験してもらおうということですね。

大きな特徴は、医療系ではない工学部の学生が参加していることでしょう。SAIPEでは入院患者さんの退院後のケアプランを学生たちで考え、患者さんやご家族に提案しているのですが、このときに工学部の学生がいることで医療系では発想しづらい実際的な意見をもらえることがあるんですね。

例えば、高齢の男性患者さんが退院するにあたって、「家族みんなでおじいちゃんを見守れるよう、ベッドをリビングに置こう」というケアプランを検討する際、チームのメンバーがご自宅に行き環境を見ると、工学部の学生が専門性を活かしてこんなことを言ってくることがあります。「ベッドをリビングのこの場所に置くと、照明の光が目に入りやすいから間接照明に替えましょう」。すると、患者さんやご家族が早期の退院を希望していても工事の関係で難しくなるので、「じゃあ、リハビリ病院で少し過ごしてもらおうのはいかがでしょうか」というようにプランが現実的な方向に進むことがあります。

「これは問題」女子少年院入所者の多くが性感染症に

——先生は埼玉県川越市の出身で、2000年に山形大学医学部を卒業後、2001年に同市にある埼玉医科大学総合医療センター産婦人科に入局します。産婦人科を選んだ理由は何ですか。

大学6年のころに衝撃的な経験をしました。地元の友人が山形に遊びに来てくれて、彼女が行ったボランティアの話をしてくれたんです。その子は女子少年院に入所している女の子と交流する活動をしたのですが、何が印象的だったかを聞くと、「性感染症がやばい……」と。性のトラブルで入所している人以外の多くの女性も、性感染症にかかっていたそうです。

私は大学5年のころに受けた実習で、クラミジアや淋病などの性感染症が不妊症の原因になり得ることを知っていました。私は医学生だったのでこうした知識を持っていましたが、多くの若者は、「無防備な性行為で性感染症になることにより、妊娠しづらくなるかもしれない」ことを知らないのではないかと。

その後、先述の友人と性教育をテーマとした合宿に参加したことで、「私も性教育をやろう」と決意しました。このときに登壇した産婦人科医が性教育の状況について、「日本の学校では性教育がタブー視されていて、子どもが学びづらい。だから、私たちが外部講師として出向き、性のことを伝えているんですよ」と語ってくれたのです。

確かに、私自身も学校ではしっかり教わっていませんでした。現在も中学1年の保健体育科の学習指導要領には「妊娠の経過は取り扱わないものとする」という記述があり、これがいわゆる「はどめ規定」とされて子どもが性教育を受けづらい状況です。性感染症の予防がとても大切なのに比べて、教育が不十分——。「よし、私も性教育を行う医師になろう」と決めました。

口コミで学校からの講演依頼増、2023年には180超える

——先生のホームページによると、性教育の講演数が2019年に135件、2021年に165件、2023年に182件とあります。たくさんやられていますね。

県内各地の小中高、大学などでお話をさせていただいています。なかでも依頼が多いのが中学校。先述のはどめ規定により教員が積極的に教えられない一方、「性のことをしっかり伝えてから子どもたちを卒業させたい」と思う先生方が増えてきたことが影響しているように思います。

初めて講演したのは2007年です。当時、国が行っていた専門家派遣事業の一環で埼玉医科大学にも依頼がありました。私が性教育をやりたくて産婦人科医になったことを覚えてくれていた教授から話があり、「ぜひやりたいです！」と。それから、徐々に学校関係者の口コミで依頼が増えていきました。

一方、私の地元で埼玉医科大学総合医療センターがある川越市は保健所経由で講演の依頼が来ています。15年ほど前、同市の中学校の先生が婦人科の病気で入院し、元気になって退院するとき、「うちの生徒に性教育をしてほし

い」と主治医に言ったそう。そこで、主治医から話を聞いた私とその先生と話したところ、「川越市は保健所が予算を持っていると思いますよ」。私はすぐに保健所に連絡、という流れです。市内には中学校が22校ありますが、総合医療センター産婦人科の先生の協力もあり、2023年にとうとう市内全校で講演することができました。

私は現在、若者が性の悩みを気軽に相談できる場づくりとして「ユースクリニック」を定期開催していますが、この取り組みは医師になる前からの問題意識や医師としてのテーマが根幹にあります。学生に多職種連携を学んでもらっているのも、これまでの活動を通して、「性教育こそ多職種連携が必要だ」と気づいたことが関係しています。

◆高橋 幸子（たかはし・さちこ）氏

2000年山形大学医学部卒、2001年埼玉医科大学総合医療センター産婦人科に入局。2007年から性教育をテーマに講演を始め、2023年には県内各地182の学校などで実施。現在、同大医療人育成支援センター・地域医学推進センター助教、産婦人科助教、医学教育センターに在籍。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

